

私のあの頃・そして、今

～ 研修所出身者からのメッセージ ～

それぞれの世界で活躍する先輩方から寄せられた、研修所への想い。
そして、現研修生へのメッセージをご紹介します。

やながわ よしこ
柳川好子 (18期)



舞台「見よ、飛行機の高く飛べるを」で初江役を演じて。(劇団CANプロ/2007)

私は現在、舞台役者をやっています。役者を目指す途中で研修所と出会いました。自分への糧の為にどうしても行きたかった研修所では、泣き虫で、甘えん坊で…一年で離れる結果になりましたが、現在、役者として舞台上に立っているのも研修所時代があったからこそです。連日徹夜同然で舞台の小道具を作っていると「どうしてそこまでがんばれるの?」と聞かれます。もちろん「好き」だからですが、研修所での様々な経験が、苦しい時には何度も何度も自分を奮い立たせてくれました。

劇団の旗揚げから七年。変動の時を迎えています。乗り越える為に欠けているのが信頼関係だと感じています。

作業や感情を共有して、好き嫌いを超えた「相手を認める」という人間関係が培われました。同期が本音をぶつけてくれたあの冬の日を忘れることはありません。問題に直面していた只中に、研修所を振り返る機会を与えて下さった神サマッて、ホント粋な方です。研修生の皆さん、たくさんの「喜怒哀楽」を楽しんで下さい。裸になつて鼻水たらして無我夢中でぶつかつて下さい。どんなことも未来につながります。研修所で出会った場面は自信として存在し続けてくれます。

私の演技の奥底にも「広がる風景」として存在していると信じています。鼓童に感動し、得たいと願った(あの)人たちの背後に広がるモノと同じように、舞台上の魂に映されていると信じています。

はしもと まいこ
橋本舞依子 (旧姓:伊藤/16期)



家庭に仕事に大忙しの2児のステキなお母さん。娘さんの入学式にて。

冷たい風が吹き、赤く染まった木の葉が散りゆく季節。私にとって十三度目の、佐渡の冬を迎えようとしています。この原稿の依頼を受け思い返してみますと、高校を卒業後すぐに入所した私は、学生気分が抜けないまま我儘な時間を過ごし、同期に迷惑をかけていたと反省をします。それと同時に「学び直したい」「ご教わりたい」ことが数多くあり、あの場所あの時に戻ってみたいと感じます。私は卒業後、実家に戻ることなく佐渡に住みつき、十年以上の時が流れました。

現在私は、佐渡島内の葬儀社に勤め、主に司会進行の仕事をしています。最愛なる故人様との最後のお別れするとき。そのときをお手伝いさせていただいていますと、音楽の世界と同じように『心で伝える』『心を通わす』ことの大事さを日々感じます。一つのことを皆で作りに上げ、思いやりを持って、無駄なく臨機応変にお客様のご希望に沿った『おもてなし』をする心。その結果として『ありがとう』素敵な式になりました。とおっしゃっていただけのこと。『おもてなし』の大切さを教えてくれた研修所生活そのものが、今の私の励みとなり、芯のある仕事をするための支えでもあります。

現研修生の皆さん。研修所には学ぶだけでなく、出会いや別れ、そこにしかない貴重な宝物がたくさんあると思います。時間を大事に、その宝物一つ一つを自分らしく見つけて欲しいと思います。同じ佐渡の空の下、いつまでも皆さんの活躍を願っています。

あさもと たかし
朝元 尊 (23期)



園児へ熱心に和太鼓の練習に取り組む、朝田幼稚園の園長先生。

私は現在、静岡県浜松市内の幼稚園や保育園の仕事、また、大学や専門学校にて講師を担当するかわら、子どもから大人までの太鼓グループを立ち上げる（鼓童メンバーのご指導にも助けられています）など、やりがいのある仕事に汗しておられます。鼓童の活動理念の一つである「くらす・まなぶ・つくる」という基礎は、幼児期の現場にも通じていると実感いたします。

さて、研修所に最年長（当時、三八歳）で人所させていただきましたが、当時、相当な決断で臨んだ事を思い出します。その、決断とは、何か断つ事を決めることですか。いま、一歩引いて想えば、鼓童の膝元で学



ばせていただく機会をいただきましたが、近くに行けば行くほど遠くに感じ、現在のように遠くならば何か近くに鼓童の存在があるという空気があります。鼓童で学ぶことは、大学で学んだ以上に人づくりという観点から言えば、優れた学びの舎だと思えます。研修生は少なからず人生の指針となるような芯の部分形成されているはずで、どこかで観た映画で「大いなる力は、大いなる責任が伴う」という言葉が記憶にあります。鼓童という存在（研修生含む）は社会、いや世界からもそう観られているのではないのでしょうか。

どうか、鼓童の芯の力を世界調和にますます情報発信してください。情報は移動距離に比例しますから。

みなみ ともゆき
南 智征 (旧姓:中島/21期)



「寺田本家」蔵人、発酵マクロビオティック料理人。「なかじ」の名で2作目の著作も。

秋の田んぼに実った稲穂がたなびく風景は、とても美しく限らない安らぎを感じます。平和の「和」は禾（稲やひえなどの穀物の意）に口。稲を口にする（食べると）心穏やかに平和になりますよ、この意味があるそうです。また和（む）は輪環・倭でもあり、稲作を中心に皆が繋がりが輪つかになること、そして人々が集い、村ができて、祭りをやる。佐渡はそんな暮らしが残る島です。研修所での二年間もまさに田んぼと芸能、地域の人々とのつながりでした。そして、そのなかで「暮らし」ということを学びました。

佐渡から、千葉の田舎に移り住んで五年。今の僕の暮らしは、夏は田んぼをしながら夫婦で自然食と自然医療を伝える教室を開き、雑誌や本の執筆活動。そして冬は造り酒屋でお酒を造っています。

す。田んぼは自家用だけで、夫婦が一年食べられる広さです。とりあえずお米さえあれば生きていけますので、自分の食べる分は自分で作り、後は自分の好きなことができています。春は田植えをし、山菜を取り。夏は雑草取り、祭り。秋は野山での収穫。冬は保存食作り。足りない分は仲間やシェアする。その中で芸能を通して神様や自然に感謝していく。日本人の暮らしはホントにもう、これで充分。そこに世界が平和になるヒントがあるような気がします。今の研修生の方にも、その日々の暮らしの一瞬一瞬を大切に、感動してもらえたらと思います。

元気に楽しく生きる「暮らし方」を学ばせていただいた佐渡のじいちゃんばあちゃん、そして佐渡の全ての人々に感謝です。